

楽翁公（松平定信）「住吉百首」について（翻刻）

中西 満 義

Nakanishi Mitsuyoshi

〔キーワード〕…松平定信（楽翁） 「住吉百首」 清水浜臣

近世和歌 「賢歌愚評」

はじめに

本稿は武家歌人として知られた松平定信「住吉百首」の一本を紹介、翻刻するものである。「楽翁公 住吉百首」の外題を有する架蔵本は、忠山公（松平忠晴）「御廟百首」とともに合綴された一本で、その奥書より、いずれも、慶応元（一八六五）年に上田藩の驚見保誠の手によって書写されたものであることが知られる。該本の特徴は、忠晴の「御廟百首」には中院通村の評が、また、定信の「住吉百首」には清水浜臣の評が、それぞれ朱書されている点にある。

定信の「住吉百首」は、すでに『楽翁公遺書』（三巻、八尾書店、明治二六年十一月）の下巻に収載されている。『楽翁公遺書』の緒言（上巻一二頁―一三頁）に

著述目録曰、むかし東福寺の書記正徹、文安年間、津の国住吉

の社に参籠して、百首の組題をよみし自書一卷を得給ひて、珍襲し給ふ、この百首の奥書にては、もし草稿にもやあらんかと、まづ神主に問ひやり給ひしが、今は什物になきといひこしたり、さらば是を納め給はんとて、みづからも同じ題にてよませ給ひて、われ下世の後、潢装して社頭に納めよとの御遺命によりて云々、と説明が施されているように、正徹の詠じた「住吉百首」に倣って詠出された百首で、後、定信の遺命によって、正徹の自筆本とともに住吉社に奉納されたことが知られる。この正徹・定信両名の自筆本「住吉百首」にかんしては、稲田利徳氏「正徹・松平定信各自筆の「住吉百首」について——^{注2} 解題と翻刻——」^{注1}によって、その存在と全貌が明らかにされている。自筆本文と較べてみると、かなりの箇所において異同が見られるが、とりわけ、巻頭の「立春」詠が、自筆本では、

花のうへにいはん物と思ふにもこゝろうきたつ春のはつかせであるのにたいして、該本では、

のとけさの心の花はけさゝきぬさくらにうつせ春のはつ風

の一首が置かれている（『樂翁公遺書』所収の本文も一番歌は「花の上に」歌である）。浜臣によって「おもしろくいひなし給へり」と評された「のとけさの」歌が「花の上に」歌に差し替えられた経緯の程は明らかではないが、浜臣の評を得て後も定信自身によって見直しが行われたことを物語っている。翻刻に際しては、稲田氏論文に翻刻された自筆本との異同を傍らに示すことにする。

定信の「住吉百首」については、定信が和歌の指導を仰いだとされる清水浜臣の批評・添削を付記している諸本の存在が知られている。一般に「賢歌愚評」という書名によって、同じく浜臣の加評を有する「春秋吟」四十首とともに纏められた一書である。この「賢歌愚評」の伝本については、神作研一氏「歌人としての松平定信——『賢歌愚評』をめぐる——」^{注3}に十二本が紹介されているが、いずれも雑題の「田家」「述懐」「懐旧」「神祇」の四題を欠く。該本も同じく、収載歌数は九十六首を数えるのみで、本文も同一の系統とひとまず考えられる。ここに、該本に欠ける雑題「田家」「述懐」「懐旧」「神祇」の四首を自筆本によって掲げておく（歌頭の番号は、百首の通し番号。翻刻本文には、四首を含めたかたちでの通し番号を振ってある）。

田家

90 たのミさへわか物ならぬ賤や守もらぬ賤のミ秋や楽しむ

述懐

96 老かミもやたけ心のひと筋はたれにゆつるの譲るへきかハ

懐旧

97 おもふそよ新羅百済の國までもわか日本の波かけしよを

神祇

98 こののはのほかなき道の為ならぬ心のおくハ神そしるへき

「賢歌愚評」がいずれも浜臣加評の「春秋吟」と「住吉百首」とを組み合わせているのにたいして、該本は松平忠晴の百首（「御廟百首」と松平定信の百首（「住吉百首」とを組み合わせているところに大きな特徴が見出せるのであるが、つぎに、該本の体裁（書誌）について、少しく触れておきたい。タテ二四・二センチ、ヨコ一五・六センチ。袋綴、表紙は支子色の横稿模様。表紙中央に色紙を貼り、「忠山公 御廟百首」と「樂翁公 住吉百首」の外題を並記（写真1、参照）。内題は「住吉百首和歌」。本文用紙は楮紙、墨付十三丁（全丁数二十六丁。御廟百首十二丁、遊紙二丁）。題および和歌を半丁に九行書、和歌の左側中段から評を朱書（写真2、参照）。

なお、忠山公（松平忠晴）の「御廟百首」については、稿を改めて紹介することにした。藤井松平家から分かれて一家を起こした松平忠晴は、松平忠周（初代）以下の上田藩主の祖として仰がれたが、その和歌事跡は意外にも乏しいようである。後十輪院通村の加評を有する「御廟百首」は、近世初期の武家歌人の和歌活動を窺い知る一斑となろう。

〈注〉

注1 国立国会図書館蔵本（マイクロフィッシュ）に拠る。

注2 「岡山大学教育学部研究集録」（六十四号、昭和五十八・十）。

注3 「文学」7・1〈特集〉松平定信の文化圏、二〇〇六・一二二。

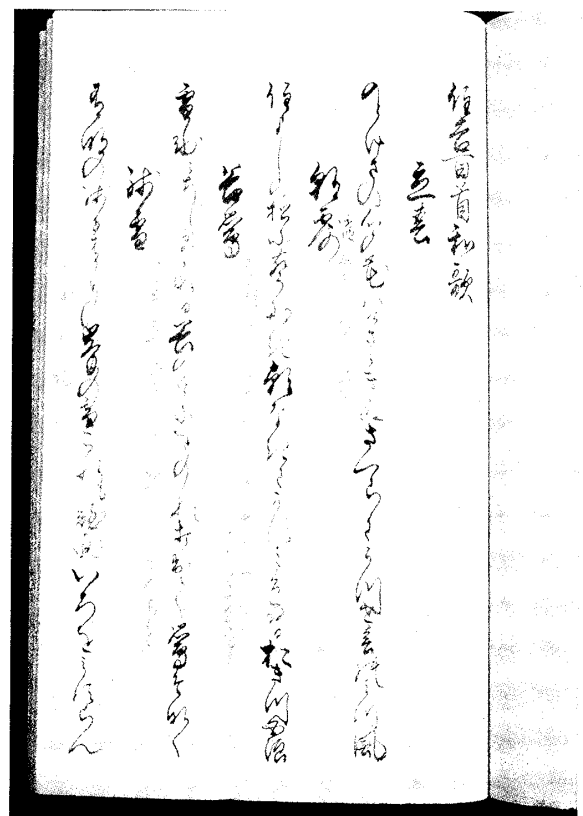
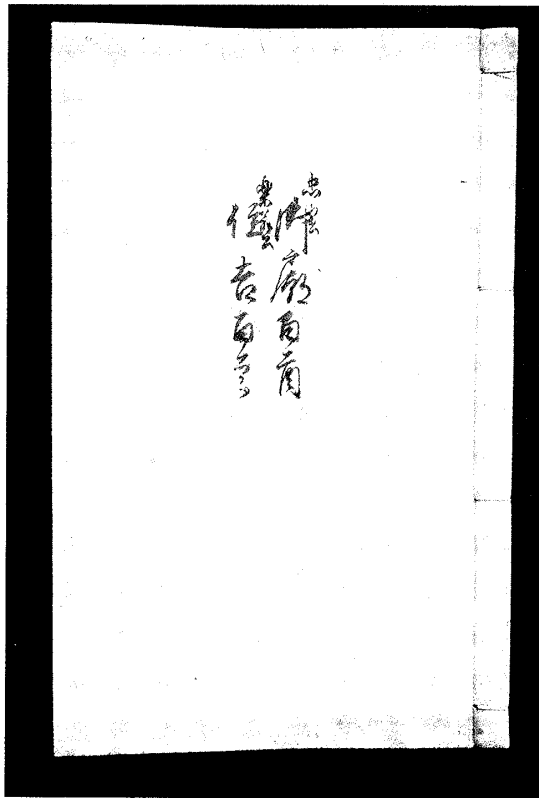
神作氏論は、「賢歌愚評」の浜臣評を示しつつ定信の和歌表現

の解明を試みられたもので、浜臣と定信との関係についての指摘も示唆に富む。

〈凡例〉

- 一、翻刻にあたって、原本に忠実であることを心がけ、句読点・濁点等も一切補うことはしなかった。
- 二、浜臣の評を記す朱書きの箇所は、題・和歌と区別するためにポイントを落として示した。
- 三、丁移りについては「」で示し、表↓オ、裏↓ウで略記した。
- 四、自筆本との異同の認められる箇所は、稲田氏論文の本文によりそれを歌の右側に示した。ただし、「らん」と「らむ」の違い等は示さない。

- 一、歌頭に、便宜上、通し番号を付した。



翻刻本文

住吉百首和歌

立春

1 花のうへにいとほん物と思ふにもこゝろうきたつ春のはつかせ
のとけさの心の花はけさゝきぬさくらにうつせ春のはつ風

おもしろくいひなし給へり

朝霜霞注1

2 住よしの松に声なき朝なきにかすみ色あるおきつ白浪

なきとあるとを歌のふしにてしたて給へる一首の上

よろしく聞え侍り

谷鶯

3 雪氷とちしまゝなる谷の戸にをのれ打出て鶯ぞなく

申旨ハはへらすされといさゝかいひふりたる心ちす

残雪

4 有明の残るはかりの峯の雪これも難面^{つれなき}いろをミすらん

つれなきの詞つかひおもしろし」一オ

若菜

5 七くさのいろも二葉の心かなかへらぬとしをつミそふれとも

いとめてたしこれらハあるか中にも御おもて歌とこそ承はれ

里梅

6 うのはなのさとの垣根にさきたちて白妙にほふ軒^{梅のひともと}の梅かゝ

申旨なし

軒梅

7 うつしうへしそのよを忍ふ友なれやなれも老木の軒の梅かゝ

これも

春月

8 春なから雪解の雲のおほろ月かすむと見ても寒きかけかな

何のめつらしきふしも侍らねとつゝけから優にこそ

春曙「一ウ

9 老らくのふかき霞のあはれまで思ひこめたる春のあけほの

申むねなし

帰雁

10 こえて行かりのなこりも末のまつすかたハ浪のよそにかすみて

たくみ給へる歌にハ侍り

春雨

11 そことなくかたらふとりの声さへもかすみにしめる春さめの空

優にこそ

岸柳

12 うき草のかたよるあとにかけ見えて風にあらそふきしの青柳

こまやかに考へ給へるうたかな

待花

13 限りありて咲へきものとおもひなは花ちる比もおしまさらなん

ことわりをつめたるさまにや」二オ

初花

14 まちをしむうさを忘れて初はなのかた枝にはるの心をそしる

曉の雲にあへるとまてハ侍らねといさゝかおほろよの心地して

見花

15 つくくくと花に向へは代^{代々}の人のめてこし春のなこりさへそふ

申旨もはへらす

花盛

16 さかぬまのうさも恋しな^くさくら花ちるほとちかきさかりとおも

へは

めつらしきいひなしにてことわりいひつめ給へり

落花

17 雪と見てあるへきものをちる花にうたても風の匂ひぬるかな

こまやかによミ給ふ御心にハ少し大そうにいひすて給へる

やうなかなたらかなるかたには侍るへし

歎冬「二ウ

18 身はなきになしてもにほふ山ふきはつかふる道の花とこそ見れ

いとめてたくはへるかな此うたなどをミても世の歌人の

こゝろよりよむうたのまれなるをなけかしこそ思ひはへれ

池藤

19 池の面ハさくら山ふさちりしきてたえまにうつるさしの藤浪

はしめの岸柳と同じすちにおもひより給へるながら

此うたハいさゝかおとりて聞えはへり

暮春

20 老か身はおほくのはるにわかれてもなれし心の今日としもなし

ことはたらすと申迄ハはへらねと御心あまりたるやうにこそ

更衣

21 世のひとの心の花のうつろふをけさしも袖の上に見せけり

心よりよミ出給へり

卯花

22 なこりしたふ春のたかねの白くもをこゝに残してうつ木咲らん

さして申旨もはへらす」三才

待郭公

23 もらさしとたれに契りてほとゝきすたつ名をそらにかくおしむ

らん

落花の御歌とすかたかたちおなしほとにや

聞郭公

24 ほとときすありあけのそらのむらさめはなかむるかたもなき行

ゑかな

下の句めてたくもはへるかな是らや餘情あるうたとや

郭公稀

申へからん

25 ほとときす花橘ハちりすきぬよかれし音をは何にまたまし

申旨もはへらす

故郷橘

26 ふるさとの花たち花ハいつのよにいつをしのひし袖のほひそ

いひふりたるやうにてあたらしく聞えはへり

三四の句なといとのひらかなりや

早苗」三ウ

27 雨まちしさなへハはやもふし立ぬうえにしかたの生たゝぬまに

ことわりつまりたるうたにハはへるへし

五月雨

28 よにあるも程こそあれとひとりきく老のまぐらの五月雨の空

申旨もはへらす但初句ハよにふるをととはへるへき

御うたにハはへらぬるや

鵜川

29 是をのミつミとないひそ網代木もおなし川瀬に下す鵜舟を

申旨もなし

叢螢

30 茂りあふ木の下くらき草むらハくれぬ先よりほたる飛なり

ちとめつらしけなくや一わたりにハ申旨もなきにはへるへけれと

いつれくも一ふしよミいて給ふか中にハこれらハ百首中の御埋歌にや

夏草

31 人目のミかるゝ野守かいほなれや草を深山のかくれ家にして

下句御心なるへし」四オ

夏月

32 霞ミなきかけとおもへは明やすきうらみそかゝるみしかよの月

めてたく御おもてうたにこそハ

夕立

33 雲きほふむこの山風吹落てこゝもすゝしき夕立の空

申旨もなし

森蟬

34 秋ちかミしくるゝせみの声よりやいろつく森のけしき見すらん

一わたりのよろしきうたとや申へからん

夏祓

35 来んとしもことしのけふハなきものをいかにいとひてミそきし

つらん

申旨も侍らす

早秋」四ウ

36 一葉散るかけに思へは木枯の行ゑわひしき秋のはつかせ

優にして餘情はへる御うたかな

七夕

37 あすよりハ歎つまなん棚機のまれの契の行合のもり

歎に木をいひかけて森ととちめたるをふしにて

よませ給へる御うたにや

萩風

38 庭のおもの秋のちくさの色かと思ひすてたる萩の上風

萩にハ打まかせたる御うたなるへし

萩露

39 けさみれはふる枝のはきの露おほミもとの心やけつかたもなき

露しけミとかつゆをもミとか

女郎花

40 あたなりと思ひとめつる女郎花ひとのこゝろも千草ならすや

さして申旨もはへらす」五オ

夕虫

41 くるゝよりつゝりさせてふ声す也たか夜寒をやわれに告らん

四の句迄ハいひふりたるやうなるを五の句に

いたりてあたらしうをかしう聞なされはへり

夜鹿

42 夜やふけぬ月や出ぬ小男鹿の遠き高嶺の声のま近き

初句夜やふけしといふへき歌也二の句のぬるにて初句のぬの

下のるといふへきをもこめたるやうによミたるならんか猶初句

ぬとのミにてハ詞たらず結句まちかさにてはへるへし

初雁

43 心よせしはるのみるめもわすれ草生てふうらの初かりのこゑ

雁なきて菊の花さくといふ歌をもとにてよミ給へるならんか

きら／＼しくそれをおもてに出し給ハぬかいとをかし

秋夕

44 ともすれハ思ふことなきわか身をも忘れてかこつ秋のゆふくれ

何ことゝ一ふしめにハたゝねと心より出たる御うたかな

山月」五ウ

45 いつるより木のまあらはにかけみえて月にくもらぬ嶺の松原

何こともあらねとあしからす聞なされ侍り

野月

46 露わけしあとゝめてこそあこかれめ月なき草の野へのかよひち

思ひあてよミ給へりと見ゆる物から月とある題に月なきと

よみ給へるハ別に御心ふかき事かおろかなる心にハたとりわひはへる

なり

河月

47 山めくる河瀬の末もはる——と月にかくれぬミつのうきこゑ

此歌水のうき声また次の歌月の白妙ハいつれも後の詞也されと

まれにハをかしきかたもはへるへし二たひとよミたらんハこのまし

からすやはへらん

江月

48 住よしの松のあらしに雲はれて細江にあまるつきの白たへ

注3

浦月

49 打むかふ心のはてもなかりけり月かけ清き秋のうらかせ

何こともはへらすなからき、過しよろしきうた也」六オ

籬菊

50 あふきみる南の山のことふきをまかきの菊につミやそへまし

ことふきハ言祝の轉語にて言葉をもて人をいはふこと也しかるを寿の字

を訓し来て命の長きことをことふきといふハ後世の誤也古人

たえていはぬことにはへり

擣衣

51 こぬつまをしのふ涙やみたるらんきぬたのおとの打もつゝかぬ

このまゝにてもあしとそハはへらねと猶初句遠つまと有たく候

一首の上ハをかしうつゝけ給へり

暁霧

52 梢のみそれとはかりはほのみえて霧におくあるあかつきの庭

これハ画のやうなる御うた也

岡紅葉

53 夕日かけみねをへたてゝ山鳥のをかへのもみちいかにそめけん

申むねもはへらす

庭紅葉」六ウ

54 めかれせぬ心にそめて露しものほかに千しほのあきのもみちは

初句にて庭の心を思はせてわざと庭といふ字をよませ

給はぬハをかしきひなしなから結句の秋のじうこきて

聞えはへれ

九月尽

55 露はしもにむすひかへてもそての上のぬれしを秋の形見とやせ

ん

一わたり聞えはへるへし

初冬

56 露しくれよそにみさほの松かえもあらしにしろく冬は来に覺

四の句倭にはへるへし

時雨

57 おともなくよにふる春にくらふれはけにうきくものしくれ也け

り

人の趾ふませ給はぬ御歌ともかな

落葉

58 この頃ハとやまのきゝのこゑたえて庭の落葉にこからの風

木ゝ木からし病にハはへらすや」七才

朝霜

59 しもの上に餌ひろふとりの跡見えて下の落葉の色もなつかし

しもの上と下の落葉とのかけあひにてなれる歌か

寒草

60 野辺ハ今尾花はかりとなりにつけりちくさはしもの下にしほれて

申旨なし

千鳥

61 神さひし宮居しつかにさよふけて千鳥なくなり住よしの浦

いと神さひたる御歌かな

水鳥

62 朝つく日かけさすかたに水とりの眠ゆたけいきのなかしま

四の句夫木ふりにやされと難ハはへらす

氷初結」七ウ

63 あさ戸出にものわすれせし心かなみれハかけひの音そ氷れる

いとをかしくよみなし給へるかな

冬月

64 木からしの色なき風も身にそしむ落葉の霜に山の端の月

是も幽玄にこそ

鷹狩

65 雲のうへにしられぬ民のなけきをも手にとるたかのみかりなる

らん

思し入たる御歌かな

野霰

66 雲氷る尾上の雪の山風に裾野ゝはらハあられふるなり

何こともあらねとよし

浅雪

67 とはれしと思ひし物をあさ沓のあとよりやかてきゆるしら雪

申旨なし」八才

積雪

68 さくとても松を絶間のはなの雲かゝらぬ山も雪のしろたへ

いひまはしにくきことをよくもいひとり給へるかな

閑中雪

69 たれかまたあとつくゆきやおり立てかきほの梅の雪をはらん

申旨もはへらす

歳暮

70 くれ竹のひとよの春をいそくかなはやまにつもる老ハおもはて

申旨もはへらす

寄月恋

71 しらてみるそなたは月もくもらしなこひしき時にいつるものと

も

上の句をかしきにあはせてハ下の句いさゝか心あさくや

寄雲恋」八ウ

72 契りしにあらぬ物からゆふくれハ心のそらくもそたゝよふ

一わたり聞えはへる也

寄露恋

73 たまさかのあふよも同じ袖の露はさてわかれのとりをきか南

申旨もはへらす

寄雨恋

74 ふりしきるまつよのあめはうれしけれとはぬ恨をかけしとおも
へハ

夜はの雨社
こそとなくてけれど、まらんこといか、三の句猶はへるへし

寄山恋

75 ふみまよふ心よりして歎こるこひの山路に身をやすてまし

一わたりの歌にや是ら御うめ歌にや

寄関恋

76 あふさかはよそにのみきくなかなれハ袖の清水に関やすへまし

四の句をかしくもはへるかな」九才

寄海恋

77 わかこひは何にたとへんわたつみの千尋の底も限り杜あれ

これも御うめ歌ならん其中にハマさりて聞えはへる也

寄橋恋

78 いつまてかつらきながらのはし柱朽はてぬ身を歎くはかりそ

申旨もはへらす

寄木恋

79 なくさむハこひせぬ人の春秋や花もみちにもおもひそふ身を

めつらしく承り侍り

寄草恋

80 わすれ草おふる軒端も夕くれハおなししのふの露ハかけすや

三の句のは露はのはさしあふやうなれと

さまでもなかるへし

寄鳥恋」九ウ

81 おもふかたのたよりいかにと詠れハとまりからすの聲さはく
り

鳥鵲喜而行人至といへるふることおほしよりたるか

いひなしをかしく候

寄虫恋

82 とはれしと思ひ捨てしゆふへにも心にかくるさ、かにのいと

これも故事をおほしよりたるか此うたハあまりにいひふりたる

こ、ちぞするまた四の句こ、ろにかゝると有たくや

寄獸恋

83 いはておもふ思ひをしれな鳴あかす外山の鹿のこゑをき、ても

申旨もはへらす

寄枕恋

84 ねもやらてつもる枕の塵のみハあるかなきかに人やすらん

塵の身といひかけて下句をいミしうもつ、け給へる哉

寄衣恋

85 夢とても思ひの外に見るものかなに、かへさんよはのさころも

めつらしからぬことをめつらしくとりなし給へるかをかしき也」十才

浦松

86 浪のこゑも万世よはんわたつみのみとりにつ、くすみよしの松

申旨もなし

窓竹

87 君か代の千とせのかけをいのる哉竹のおきふしまとの明けくれ

下の句おほしのこる所一ふしありて聞なされ侍り

山家嵐

88 馴ぬるや松のあらしの吹ぬよはさすか友まつやまのしたいほ

優につ、け給へり

山家水

89 苔清水たえなはたえねひとかたに結びとむへき山のいほかな

幽玄にしてしかもつよきところあり

故郷」十ウ

91 八重むくら^{それ}い^もいつ^{しか}かし枯はて、とりのね寒き故さとの庭

吉水僧正か口つきはへるかな

水郷

92 な^{注4}には江のあし火たくやのひかりこそこや誰かふねのしるへなるらん

□^{こぞ}といひてやとはさみらんとちめてには

いまた覚悟しはへらす

関路

93 いにしへのせきハいつこも秋の風よはの月のみもりあかしつ、

めつらしくはたいひおほせたりや

海路

94 山といへは限りこそあれ海原ハちさとの外もひとつ浪路を

申旨なし

羈旅

95 ふるさとにまつらん袖のうへまでも旅ねのよはの月にかたしく

三句五句緊要にや」十一オ

釈教

99 我国のひろきをしえの道なれハほとけの法もあるにまかせつ

実にめてたくもはへる釈教の歌也かゝる心をよめる

釈教の歌未嘗有にこそ

祝

100 あひにあふ神と君とのめくみにていつこもひとつ住よしのさと

めてたく候

百首のうち雑のうた四首たらずや

さきにおほせことうけたうまりて二十首の御うたよしあし聞え奉りしに

こたひまた此百首をさためあらずへきよしの給ひつけたまふいと

おそろしとおもへと心の限りしるしつけて奉りぬいてや浜臣らかをち

なき心におほけなくもかしこくもとかく云ましへ申へきことならねと猶申さハ／

御うたはしめの二十首よりハきハことよろしくこそうけ給はりはへれ但

かく申ハいとをこにはたかしこくもはへることながら此百首ハこたひよミいて／

給へるのミにもはへらしはやくよりよみおかせ給へるもましりてよきか

「十一ウ

中にもよきをえり出給へるのミにもはへらしはやくよりよミおかせ

給へるもましりてよきか中にもよきをえり出給へるにやはへらん数おほきか

かくまておとりなくめてたくはへらんことあらたによみてんとてハかたくも／

あへハことにこそ侍れさハいへこれハ浜臣らかつたなき心ならひに思ひくらへ奉る／

なれハ猶あらたによミ出給へるのミにそはへるへきあなおそろし／

浜臣 上

文化八年二月此百首を評して奉りたれハ又自書して
たまへる陳状

五月雨

是ハ少々得意にて是まで外へ認めつかはし人にも見せ候世々ふるに
てふの字をあともみちかへ認候と見え候

夜鹿「十二オ

声のまちかきはわさと思ひ入てきの字にいたし候夜やふけぬはしの
字いかにも尤是ハ改め可申候

野月

野もせ月のかけの露にうつるをちらさしとて人のわけし
あとの一すちはかり月のうつらぬを行ましと申にて候

河月

水浮声ハおもひよらす候浮霧にて候をよミたかへ候と一笑
歌よミ不申ものにか、せ候間大なるかなもちかひおり候

擣衣

こぬつまよりハ遠つま遙にたちまさり候

庭紅葉「十二ウ

秋の字庭にかへ候事尤に候事

水郷

いかにも是ハ一句にふ得意いつそよみ置し候ハんと数その
まゝにいたしおき候雜のうち三首はいまだ得意無之候

一たい此百首文化六年十二月十日ほとの中に一わたり

よみ候旧作ハ無之うち帰雁見花落花待時鳥聞郭公

夏祓曉霧朝霜などハ同じ年の十一月によみ候その

餘翌とし正月より五六月迄よみ候のを十一首加候みな

初メよみ候うちの不得意なるをけづり候此うへも心かく

へきとてほとへければ拍子もぬけそれなりにいたし候これハ

住よしへ奉納いたし可申ふくみゆゑ右之通也住吉

百首と申ハ徹書記の奉納の題にて候「十三オ

右は白河少将楽翁公之御詠也山崎知方主之

庫書によつて写書也

慶応元乙丑

閏七月

鷺見保誠

「十三ウ

〈注〉

注1 題「朝露」の「露」の右脇に「霞」と記す。自筆本も「朝霞」。

注2 「ぬ」「る」の右側は□。80・92番歌の評の箇所も同じ。

注3 この歌にのみ浜臣の評は施されていない。

注4 「は」と記し、「に」と傍書して改める。